

富士水碑

る。文章の板切りのスタートは漢文を現代文を問う論
置から始めている。漢字の配置は確立し、漢字の
文字の解説も難い字は「富士水明の語源」各語の漢字

遠藤 長次郎



甲西バイパスと旧道の分岐点にある富士水碑
(場所：富士川町鯉沢1389)

目次と内容の概要

一 はじめに

．．．．． 2

富士水碑について 富士川水運事業 富士水碑の
訓読について 本誌の内容 富士川・急流の状況
急流を利用した観光と遊び ラフティングのDVD

二 富士水碑の現代語訳

．．．．． 6

碑文に刻まれた漢文を解りやすく現代文に直してあ
る。文章の区切りのスタートは漢文と現代文を同じ位
置から始めている。漢字の配置は碑文と同じとした。
文字の解読し難い字は「富士水碑の訓読」参考して頂
きたい。

碑の本文は縦四八文字の一六行で構成されている、
本文もこれと同じ配置とした。①～⑩・A～Q・注1～2
・①～⑩は9～11P「石碑の文字及び注釈」参照。

三 石碑の文字

．．．．． 9

富士水碑の現代文の①～⑩・A～Q・注1～2・等
を町誌・資料と石碑の写真と比較してある。

四 注釈

．．．．． 10

①～⑩は現代語訳の難解な言葉を解説している。

五 水路改修工事に関する考察。

．．．．． 11

シュンセツ
浚渫 工事に関する私の考えを述べている。

六 漢文の返り点等のルールについて。

．．．．． 12

漢文の返り点・レ点・熟語の使い方について独自の
ルールを用いた、この事について述べている。

七 富士水碑の訓読

．．．．． 13

碑文の一行を一点鎖線の中の二行に収めた。訓読文
及び現代訳はフォントサイズ「6」で収めた。文章の
区切りの関係で半分のサイズの字で行の上または下に
ついている所があるのは、訳文が途中で解りにくくな
るのを防ぐためである。

実際に現代文訳と訓読文訳の両方を比較すればよく
わかる。

一 はじめに

富士水碑について

富士川の浚渫工事は、徳川家康の命令で角倉了以が手掛けた。工事は慶長十二年（一六〇七）に始まり、慶長十七年（一六二二）に竣工したのである（（歟沢町誌））と言はれている。

慶長十九年（一六四四）に手直しがあり、それ以降本格的な水運が始まったと考えられる。この水運によって歟沢の町は大正末期（一九三三）まで極めて繁栄した。

また、この富士水碑には、「現地の人々は水運を可能にしてくれた角倉了以に末代まで感謝しなさい」と、熱く語りかけて寛政九年（一七九七）に建立した。

昭和の初めから国道五二号線の改良工事による道路の嵩上げで路面が高くなり、水運盛んな頃には運輸会社の敷地に有った石碑は、次第に人目につかなくなった。此の度の甲西バイパスの完成とともに多くの関係者の努力によって、見晴らしの良い旧道とバイパスの分岐点に富士水碑が設置されたことは大変喜ぶべきことである。

富士川水運事業

富士川水運に関しては「歟沢町誌」（大八九一〇一〇一）に青山靖氏・望月武美氏の執筆で詳しく述べられているので

で参考にしていただきたい。

江戸時代に甲州・信州から上納された年貢米の輸送に活躍した水運も、明治に入ってその性格を一変した、（藤村紫朗）藤村紫朗県令（県知事、特に山梨県の治水事業を推進した人、日本の歴史二一巻中央公論社）と国の指導によって明治七年（一八七四）「富士川運輸会社」（社長は初代遠藤聰知・二代遠藤隆吉・三代遠藤三郎）を設立し、水難事故（対人・対物）などの保険制度も充実に営業した。

東海道線の開通に伴い歟沢から東京まで一日で行けることになり、乗船客も増加して明治二四（一八九一）・二五年頃には二三〇〇〇人／年にも達した、舟は早朝三時と午前の二回歟沢を発進し、九時間程度で岩淵に到着した。運賃は早朝が高く四五銭、午前は三〇銭であったと記録されている。明治三五年（一九〇二）七月に中央線は笹子トンネルの開通で甲府まで営業運転を開始した。

大正七年（一九一八）四月には身延線が富士宮から芝川まで大正九年（一九二〇）五月に身延まで開業した。

この様な、安全・迅速・低コスト化された運送が確保できる交通網の整備に、急流河川を小型の高瀬舟を使い、しかも人力で出水時には通行止めになる不安定な運送業はもはや対抗できなくなり、大正十二年（一九二三）二月に「富士運輸会社」は解散した。

富士水碑は、当時富士川運輸会社の敷地に有り、社長の遠藤三郎がこの土地を引き継ぐことになり、平成二二年

(1010)公園用地(1004E)として町が買い上げるまで遠藤家で所有していた。

富士水碑の訓読について

町誌には石碑の全文の訓読はなされていない。また、色々な資料を見ると本文と異なった文字が記されている箇所がある。これだと石碑本来の意味が伝わらないと思い、実際の石碑の字を確かめた。(9p)

碑文の訓読を娘に読んでもらったところ、「これでは解らない、難しいことを並べても仕方がない現代に通じる文章ににして下さい」と言われた。これに倣って石碑の字と現代文を並べて石碑の内容を解りやすく作ってみた。(6p)
また、昨年解読した訓読文も(13p)以降に漢文・訓読文・現代文を並べた。

本誌の内容

本誌の内容は鯉沢町誌・富士川舟運資料(山梨県の漢字碑位置(ハ郎青)・富士水碑銘(安藤豊造著)などを参考にした。

富士川・急流の状況

富士水碑にもあるように、鯉沢から岩淵までは急流である。したがって舟の遭難事故も多数発生した。これ等の遭難者に対する慰霊碑は、天神が瀧・釜の口の近くに建立さ

れている。

明治の初期に。藤村県令に同行した富士川運輸会社の副社長・秋山源兵衛が遭難死。また、日露戦争に出征する兵士が、出水のため川止めになっているのに強引に舟を出させて遭難、乗舟者全員が死亡する。などの事故も記録されている。

古老(一九一八年生)が、幼少の頃富士川下りをした時は「難所は舟を降りて歩いた」と語っていた。また、昔国鉄に勤務した電気技師(一九九三年生)が、実際川を下った時は「舟は数艘で船団を組み、難所を通過する度に先頭の船が最後尾になり、お互いに助け合い、安全を確保しながら舟を航行した」と語っていた。

急流のため通船困難な箇所を昔は「アクバ」と呼んでいた。このアクバは、上流から*天神が瀧*屏風岩*早川尻*舟取石*釜の口・浮州森・獅子山・オーボー島・糸尻・尼崎、などが有った。

*天神が瀧

富士川の三大難所の一つで三船着場(鯉沢・黒沢・青柳)から出発して最初に遭遇する難所で、文化一三年(一八八六)には大規模な改修工事をした。

* 屏風岩

富士川と早川の合流地点で、大きな屏風を立てたような岸壁に富士川の水流が直角に当り急流を作っている難所。この近くには早川尻などの急流もある。

* 舟取石

その昔。南部に無縁法界の石塔、間近に舟取石と言う大岩があった。ここで毎年一〇名以上の遭難者が発生した。出水時は川幅が広くなり、舟は陸近くを通るので問題ない。過ちは多く平水時にあり、船頭が竿さばきを誤って遭難した。しかし、天の恵みであろうか？突然川の瀬が変わり舟取石は危険でなくなった。

* 釜の口より下流

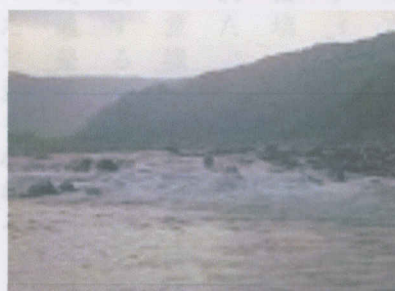
富士川最大の急流地区。富士山が噴火した時の溶岩が釜の口から駿河湾にかけて川筋の各所に現れて急流部を作っている。この地区は日本軽金属が身延で常時三〇丁/秒（最大六六丁/秒）取水して発電しているので上流部より水量は少ないが流域に降雨があると釜の口の下流からラフティングを始めるほど前釜の瀬・釜口の瀬は急流である。現在、前釜の瀬、以下については、釜口の瀬・デビの瀬・ボッキーの瀬・ドラゴンの瀬・クラッシャーの瀬・サギの瀬・奈落の瀬・デビデビの瀬・ワニの瀬等の名称が

つけられている。現在の名称が一五〇年前の名称とどのような関係にあるか不明である。

急流を利用した観光と遊び

* 釜の口（鉾子の口）より下流

左の写真は「ナチュラルアクション」富士宮市内房がラフティングを提供している芝川駅に近い新内房橋から



蓬萊橋まで四キ。

を二時間かけて

下る。途中の瀬

で遊泳・岩場からの飛び込みなどを楽しむ。

写真は蓬萊橋に近い急流である。新内房橋付近は富士川の三大難所の一つで釜の口と言い、富士山の溶岩がここまで達して川を塞ぎ急流を作っている。残念ながら発電用の取水口より下流のため水量が少ない。

* 屏風岩付近の急流
次ページの写真は、身延町飯富の近くにある富士川屈

指の屏風岩の急流である。ここは発電用の取水口より上



流であるから豊富な水量は昔と変わらない。

「富士川倶楽部」(身延町宮木一七〇五)は屏風岩の急流を利用してラフティングをしている。屏風岩に水が当たるとは、静になっていて上の岩場から川に飛び込んで遊ぶこともできる、すぐ下流に早川尻の急流箇所が続き、ラフティングが十分楽しめる。

* 天神が瀧の急流

天神が瀧は鯀沢を出発して最初に遭遇する難所である。此の難所を高瀬舟を使って舟下りをしている。富士川町鹿島の鹿島橋から身延町西嶋の峡南橋まで三、五キロを二時間かけて下る、昔の風景をそのまま見ることができる。地元峡南高校の同窓生数名で富士川舟運株式会社を立ち

上げて二〇一二年から営業を開始している。

ラフティングのDVD

(画像に出てくる年号の表示が間違っている)

富士川がいかに急流であるか、また、昔・関係者がいかに苦労したかを実感するため、ナチュラルアクションの佐野社長の協力を得て、二〇一三年十一月十四日・十五日の二日かけて富士川町の富士橋から富士市岩淵迄の約七十キロをラフティングをして下った。

幸にも、当日は塩ノ沢から下流の水量も多く富士川の難所が各所に現れた。

現在と異なり、重機の無かった時代に。洪水後の落石の処理や浅瀬に関する水深の確保また一日に百艘近くが上・下する舟の交通整理など江戸・明治時代の関係者の苦労は大変であったとおもわれる。

日本第一の断層帯の中を貫流しているこの川は左右から不安定な急斜面が迫り、自然のままの河川は斜面の崩落が日常的に起っていたことと思われた。

* 富士川を下って感じたこと

- 一 川の各所に巨石が在り山崩れの激しき物語っている。
- 二 近年、河床の低下が激しく橋脚基礎が各所で露出している。
- 三 芝川の本釜の急流部の中央にある巨石は数十年前右岸の壁が崩落したものだと言っている。

四 平成二十五年十月の大島台風と同じ日に蓬萊橋付近では、左岸の壁が大規模な崩壊をして今でもその残骸が水上に現れている。

五 身延の角（ツノ）打ちの下流、約三キロに亘って点在する巨石は、長い間にまわりの山が崩落して流されずにこの付近の水中に留まっているように思える。

六 玄之（十ページ注釈）が慶長十九年に水路の壅塞を開放するために富士川に入ったのも大規模な土砂崩壊が原因で有ろうと想像している。

*富士川下りのタイムテーブル（A）二〇一三年十一月十四日

（映写時間一日目は三九分二四秒）

九時四一分	富士橋をバックにラフティングボートの段取り
十時〇一分	ラフティング・スタート・川下り開始
十時〇六分	清水端の水位観測所、禹の瀬を切削した所
十時三四分	天神が滝
十時四五分	川の中に、山から落ちた転石が見える
十時五五分	川の右岸に沿って国道五二号がよく見える
十時五九分	月見橋（この付近で最初に鋼橋になった橋）
十一時三四分	開運橋が見える
十一時五七分	飯富橋の橋脚基礎周辺の砂利が無くなっている
十二時三七分	屏風岩の荒瀬

十二時四七分	波高島の富山橋がよく見える
十三時〇〇分	早川尻の荒瀬 この付近は洪水の度に瀬が変わる
十三時三八分	塩ノ沢の堰堤（日軽金富士川第一堰堤）
十四時〇一分	身延橋・身延駅前商店街を川側から見る
十四時一〇分	角打の和田開発揚水機場見える
十四時一二分	素晴らしい荒瀬
十四時一五分	巨石が川の中に点在する
十四時二一分	多数の巨石が川原にある
三〇分	清（セイ）子開発揚水機場が見える

*富士川降りのタイムテーブル（B）二〇一三年十一月十五日

（映写時間二日目は三八分〇八秒）

九時五五分	第二日目 寄畑からスタート
十時〇七分	荒瀬
十時一〇分	富栄橋と国道五二号が右岸に見える
十時一七分	大きな転石が川の中にある
十時五一分	十（トオ）島の取水口（日軽金富士川第二堰堤）
十一時〇九分	左右を岩に挟まれた荒瀬（相当河床が低下している）
十一時一三分	万栄橋の下を通過
十一時一四分	正面に静甲工業（碎石工場）川には巨石が多数
十一時三一分	富士川が大きくUターンした南南西の先端
十一時三五分	大きな石が多数見受けられる

十一時五二分 稲子川が合流

十三時〇九分 ナチュラルアクションの基地で昼食

十三時四一分 午後のスタート

十三時四三分 銚子の口 前釜、内房橋が正面、溶岩が露出

十三時四五分 釜の口を通過、通過時間は三十秒だが富士川第一の難所その荒瀬の様子をご覧あれ

十三時四六分 釜の口左にある岩は数十年前右岸から落ちたもの

十三時四六分 溶岩が壁のようになってるのがよくわかる

十三時五六分 素晴らしい荒瀬

一四時〇一分 富原橋が見えてくる

一四時〇四分 柱状節理の岩が落下している

一四時一七分 蓬莱橋が見えてくる

一四時一七分 左岸の溶岩の壁が二〇一三年一〇月一五日大

島台風時に崩落して残骸が水中に残っている

佐野社長が富士宮河岸についての説明をする

十四時二二分 第二東名高速道路が見えてくる

十四時三七分 荒瀬 テトラポットをかわして

十四時四五分 ワニの瀬一〇月一五日の台風で瀬の状態が変化した

十五時〇五分 東名高速道路の橋が見えてくる

十五時一五分 最後の荒瀬

十五時二〇分 富士川に架かっている橋の説明

一番手前が旧国道一号 次はJR東海道線

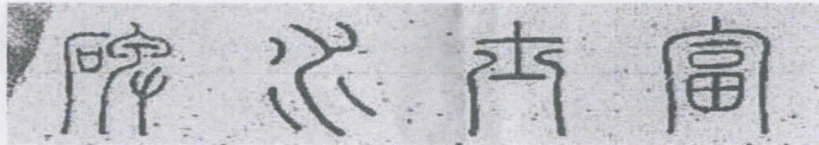
・新幹線・国道一号の順

十五時二五分 灯籠の有る所が昔の河岸だった

十五時二七分 富士山がよく見える富士川は四ヶ郷堰（シカゴウゼキ）

十五時三五分 お疲れ様でした

二 富士水碑現代語訳



フ ジ ス イ ヒ メイナラビニジョ
A 富士水碑銘并序

クロ カワ ヨシ ヒロ
下毛野黒川好祖撰

富士水有三源其一出於信州駒嶽釜無水是也其二出於甲州其出於笹子嶺笛吹水是也其出於金峯山荒水是也合爲

富士川には三つの水
源がある

① その一つは信州駒ヶ岳から出る釜無川である

② そして残りの二つは甲州の笹子嶺から出る笛吹川と金峯山から出る荒川である

富士水至駿州而入干海懸騰百餘里雷呵電激禹不能鑿丹不能通剗木以來未有舟楫何則出高山而下界濕攝巖石而

③

① 雷鳴が怒鳴りあうような激しい水勢が百里あまり続く

④

⑤ 太古の昔から未だ嘗て舟は通らない

⑥

⑦ ④ C 巖ついで岩に挟まれ水勢が激しく

合流して富士川となり駿河に至つて海に入る

怒水勢也及 神祖之覇有天下啓勅民之患苦轉運欲通舟楫以弛負擔之勞募巧水利者於朝野吉田君應募而上言曰

⑧

⑤ 家康が天下を治めることに成り

D 注

家康は庶民が荷物の運搬に苦労しているのを憐み、舟を通すことでこの負担を軽減しようと考えて

河川改修に関して優れた技術者を天下に募集した吉田（了以）君これに応じた

水之有舟楫猶陸之有車馬陸無不可車馬水無不可舟楫也 神祖可其言慶長十二年命君爲川衡浚富士水君至觀之

陸路で車馬が使えるように水路が有れば舟は使える

E ⑨

了以を川衡に任命して富士川の浚渫を命じた

⑩ 上言した「水路で舟を使うのは、陸路で車馬を使うのと同じである」

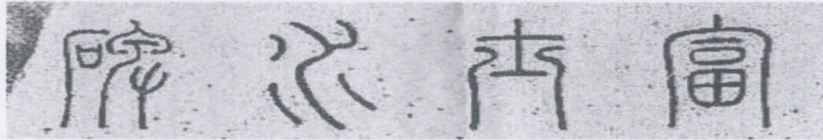
自三源至鰐澤黒澤青柳三津不勞而通自三津至駿州岩淵有如瀧者有廣而淺者有石出水上有潜而伏者其如瀧者

三・源から鰐澤黒沢青柳の三・船着場迄は工事をしなくても舟が通れる

三・船着場から駿河の岩淵までは

（舟を通す水路の中に）瀧の如き所・広くて浅い所・岩が水上に出ている所・浅い水中に岩が潜んでいる所・などが有る

瀧の様な所は高い岩を



鑿高而平之其廣而淺者積石而挾之其石出水上者燒爛而碎之其潛而伏者作徑尺長二丈錐頭杖構浮樓以下之因轆

⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

削り壊して川底を平らにする

水上に岩が出て通船の障害になるところは之を焼いて柔らかくして壊す

直径一尺長さ二丈の柱に鉄の頭を装着し浮き櫓に吊り下げる轆轤を用いてこの柱を上下して

轆以舉之必碎而後舍之不厭財力勞費之多少是以功成而舟通溯游則一日而下雖其溯洄者無過三日四日也是以信

費用と労力の多少を厭わなければ工事は成功して舟が通行出来る

舟が通ること
で信州・

潜った水中の岩を破碎する、破碎した石くずは捨てる

三・船着場から岩淵まで下りは一・流れに逆らう、のぼりでも三日で済み・四日以上は掛らない

甲飽於魚鹽而駿土足於材木五種百物副焉自是以來縁河之民仰食於其利者以千百數不特人物馬牛省勞也其後八

甲州では魚・鹽が十分に行き渡り

舟の往来が始まってから川沿いの住民の内、舟運で働く人々は千数百人を超えていた

其の後八年が経過して

駿河では木材が容易に入手でき、五穀や様々なものが手に入る

始めに考えていた人馬の勞を省く以上の効果があつた

年川復壅塞將召君而謀之時君有疾長子玄之代父應命以三月發服役百數日川流稍稍欲復古會君疾病玄之告暇而

川に閉塞した箇所が発生した

長男の玄之が了以に代わって工事を担当することになり三月に京都を出発した

丁度その時、了以の病が悪化したと知らせを受け玄之は急いで

了以を呼び寄せて閉塞を解除しようとしたがその時君は病氣であつた

工事を始めて百日余り、川の流れはほぼ以前の状態になつた

省之至則前二日既已易簣實慶長十九年秋七月十二日也行年六十有一君諱光好字與七後號了以姓源城州嵯峨之

国に帰つた

行年六十一歳である

姓は源・城州嵯峨の

到着の二日前に已了以は逝去していた実に慶長十九年（一六一四）秋の七月十二日であつた

了以の生前の名は光好・字名は與七・後に了以と號した

人也系出於 宇多帝杵居江州爲佐佐木莊司後別居洛東吉田故或曰佐佐木氏或曰吉田氏京師四隅有官倉其西倉

出身である

代々江州に住んでいた、この時は佐々木莊司と言つた

從つて佐々木とも或るいは吉田ともいう

血筋は宇多天皇の系統で

後に転居して洛東の吉田に住む

京の四隅に役所の倉が有り其の西の倉を

總高而平之其竇而美香野石而刺之其石出水土香數載而報之其德而為香并野只是二文雖顯其辭野對以不之因辭

日隅倉君五杵祖德春徙居其地故又日隅倉氏德春子宗林宗林子宗忠咸富累巨萬事霸主足利氏宗忠子宗桂薙髮學

了以の五代前の先祖・德春が角倉に移り住んだので角倉氏と言った

足利幕府に仕えていた

隅の倉と言った

德春の子・宗林・宗林の子宗忠皆富豪（嵯峨の土倉・金融業）であった

宗忠の子・宗桂は髪を剃って医学を

醫嘗随僧良策彦而之明明人號之意庵歸而業益進娶中村氏生君君長而有仕志唯不欲事織田豊臣両主遂謁神祖

かつて僧侶・良策彦に随って、明（中国）に行った

帰国して医業はますます繁盛し

中村家から妻を娶り君が生まれた

君は成人して主君に仕える気持ちはあったが、ただ織田・豊臣両主君には仕えようとしなかった

勉強した

明の人々はこの人に意庵と名付けた

その後徳川家康に謁見を賜った

最精水利凡君所疏鑿畿内有鴨水大井水東海道有天流水富士水皆無不為萬杵之利也後言水利者祖述之寛政九年

最も水運に精しく

畿内に鴨川・大堰川（保津川）

いずれの工事も社会の重要な役目を果たしている

寛政九年ひのと

凡そ君が通船可能にした河川は

東海道に天竜川・富士川が有る

今後河川改修に携わる者は良くこれを参考にしたらよい

丁巳冬十有二月欲立石而勒君功績令信甲駿民無忘其惠甲州鰍澤里魁來乞余辭余嘗吏丐其地也銘曰

み・冬（一七九七）十二月

甲州鰍澤の名主が私に碑文を依頼に来た

今までの事をかいつまんで言うと

君の功績を刻んだ石碑を立て信州・甲州・駿河の人々が富士川通舟による恵みを忘れることのないように

私はかつて、この役所に勤めて居たからだ

潜詰了以下此河瀬疏通水道資勸民矣石勒其績立鰍澤津迄于萬年永念其神

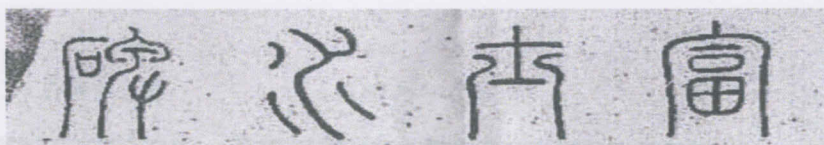
河川改修の大家了以は

地域の人々に贈ってくれたその功績を石に刻み

万年先まで、永く其の神技を思い出しましょう

此の川を舟の水路に改造して

鰍沢の船着き場に建て



東武藤原知柿書并篆額

チカク

ケイウン

神慶雲刻字

日嗣會正吉野齋香翁其狀始又日嗣會丑齋香千宗林宗林千宗忠貞富累百萬事羅主臣降丑宗忠千宗封蘇邊學

三石碑の文字

目次の概要で述べたように、鯉沢町誌及び富士川舟運資料（山梨県の漢字碑）に異なる文字が使われている所がある、これらの字を現地で写真に収めて碑に使われている文字を確かめた。

石碑の字の比較

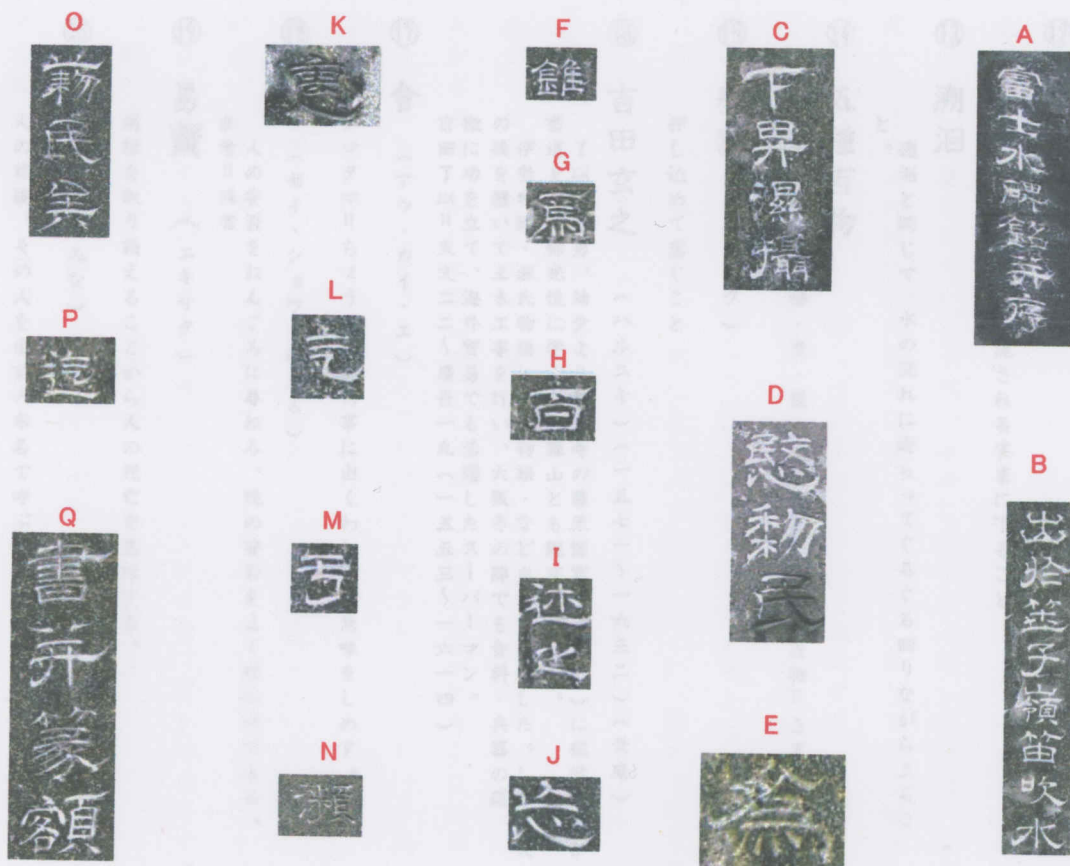
	碑の字	町誌	資料
①	嶽	嶽	岳
②	峯	峯	峰
③	州	州	河卑
④C	界	界	黎
⑤D	勑 ^{注1}	梨	錘
⑥F	錘	錘	錘
⑦G	焉	爲	焉
⑧H	百	百	可
⑨	流	流	龍
⑩	勒	勤	勒
⑪M	亏* (干)	亏	干
⑫	濬	浜	濬
⑬	喆	喆	哲
⑭	瀨	瀨	瀨
⑮	勑 ^{注2}	枸	藝
⑯	迄	治	迄

* () の中は左の字と異体字

写真撮影した石碑の文字

A	富士水碑銘并序
B	出於笹子嶺笛吹水
C	下界濕痛
D	愍勑民[之患苦] ^{注1}
E	爲
F	錘
G	焉
H	百
I	述之
J	忘 (忘)
K	惠
L	乞
M	亏 (干)
N	瀨
O	勑民矣 ^{注2}
P	迄
Q	書并篆額

注1、注2 とともにモロモロノ人々の意味に採れるが、撰者は何か別の意図があって字を変えたと思われる。



四 注釈

- ① 懸騰 (ケントウ)
水が勢い良く沸き立つこと。懸河川河を吊り下げたように流れの激しいこと。
- ② 雷呵電激
雷が怒鳴り合う様に激しく鳴ること。稲妻が烈しくおこること。呵川咽喉をからして叫ぶ、叱る。
- ③ 禹 (ウ)
中国古代、夏(カ)の開祖とされ伝説上の聖王、黄河の洪水を治めたと言われている。
- ④ 丹 (タン)
丹朱(人名)川古代中国の伝説上の天子、帝堯(ギョウ)の子。
- ⑤ 剗木 (コボク・クボク)
剗木爲舟(木(キラ)剗(ホリテ)舟(フネト)爲(ナス)。U型に木をえぐりとる。
- ⑥ 舟楫 (センシユウ)
舟と櫂川舟のこと。櫂(シユウ)かじ。水をかいて舟を動かす道具・かい。
- ⑦ 昇濕 (ヒシツ)
湿り氣を与える。川水しぶきを上げる。昇川(ヒ)を与える。
- ⑧ 神祖
徳川家康(一五四二―一六一六)、將軍を一六〇三―一六〇五年迄勤める。
- ⑨ 川衡 (センコウ)
古代中国周の官名、ここでは徳川家康が了以に河川の管理・改修・水利行政権を与えた、と考えられる。
- ⑩ 焼爛
焼いて強度を低下させること。
- ⑪ 轆轤 (ロクロ)
木製で数人の力で槌(テ)子を応用して重いものを引く道具。かぐらさん等とも言ふ。
- ⑫ 溯游
溯游と同じで、押し流されるままに下ること。
- ⑬ 溯洄
溯洄と同じで、水の流れに逆らってぐるぐる回りながら上ること。
- ⑭ 五種百物
五種川五穀即ち稲・麦・粟・黍(キビ)、稗。百物川さまざまな物質を言う。
- ⑮ 壅塞 (ヨウソク)
押し込めて塞ぐこと。
- ⑯ 吉田玄之 (ハルユキ) (一五七一―一六三二) (素庵)
了以の嫡男、幼少より相国寺の藤原惺窩(セイカ)に儒学を学び書道の本阿弥光悦に学ぶ。林羅山とも親交があった。伊勢物語・源氏物語・平家物語・など自力で出版した。しかも父の後を継いで土木工事を行い、大阪冬の陣でも食料・兵器の運搬に功を立て、海外貿易でも活躍したスーパーマン。
- ⑰ 會 (アウ・カイ・エ)
タマタマリちようどその物事にいくわしたの意味をしめす。
- ⑱ 省 (セイ・ショウ・かえる)
人の安否をねんごろに尋ねる、親の安否をよく確かめてみる。参考川帰省。
- ⑲ 易蕒 (エキサク)
病床を取り換えることから人の死亡を意味する。
- ⑳ 諱 (キ・いみな)
人の死後、その人を生前の本名で呼ぶことを避ける。

②1 系

血筋。

②2 剃髪 (テイハツ)

髪を剃って僧になること。

②3 僧良策彦 (兼藤周良) (ソウリョウサクゲン) (一五〇一—一五七九)

当時の高僧で通明使として活躍、信玄とも親交があり身延に住んでいた。信玄の姉(穴山信友の母)及び穴山信友とも親交があった。

②4 祖述 (ソジュツ)

遠く先人の道に基づいて述べること。

②5 里魁 (リカイ)

後漢・南宋の制度で、里の長。

②6 吏

役人の通称、どちらかと言えば位の低い役人。

②7 濬詰 (シュンテツ)

濬川(瀬川)の底をさらって深くする、浚渫。詰川(詰川)で、やり方が適切。従って「濬詰は」、川のそれぞれの所に応じて最適な施工をさす。

②8 瀬 (ヒシ)

水ざわ。

②9 賚 (ライ)

賜る。

③0 神

神技(カキ)力量がずば抜けて優れた様子。

五 水路改修工事に関する考察

水深の浅い所の浚渫工事は、小誌では、(7P)一行め半ばから次のように記載されている「浅い水中に岩が潜んでいる所は、直径一尺、長さ二丈の柱に鉄の頭を装着し、浮き楼に吊り下げて轆轤を用いてこの柱を上下して潜っている水中の岩を破碎する」とあり。

一方、京都の嵐山大悲閣千光寺にある「河道主事嵯峨吉田了以翁碑銘」には、「水中に在る(岩)はすなわち浮楼を構えて、鋭い鉄の頭、長さ三尺、周(周)り三尺、柄に長さ二丈許(ハカリ)に、縄をつなぎ數十余人で挽(ヒ)き扛(ア)げ径(タヂニ)之を投下して石悉(コトゴトク)破散す」とある。

此处で問題になるのは、柱(浮楼に吊り下げた分銅)を何によって上下したかである、柱の重量は四〇〇〇五〇〇kgであると考えられる。轆轤を使った場合は巻き上げることは十分できる、しかし、小刻みに上下して岩を砕くには不向きである。

千光寺の碑のように数十人で綱を引けば柱は簡単に引き上げられしかも、小さいストロークで小刻みに柱を上下できる、岩などを破碎するのに最も有効と考えられる。この工法は昔堤防工事などで堤体の転圧工法として(ヨイトマケ)用いられていた。

千光寺の碑は了以が逝去して十七回忌に建てられたもので、長男玄之も健在であり、実際の工法を正確に伝えていると考える。

六 漢文の返り点等の使い方のルールについて

本来漢文の返り点・レ点・熟語の連結の―は右の列の様であるが、今回 P C のエクセルを使い本来の表示に手間が掛ったので簡便的に左のような表示とした。

今回の表示	本来の表示
上 勞	上 勞
下 募	下 募
二 巧	二 巧
水	水
之	之
二 患	患
苦	苦

熟語の結合

今回の表示	本来の表示
二 將	二 將
レ 召	レ 召
レ 君	レ 君
而	而
二 謀	二 謀
レ 之	レ 之

返り点

レ点

返り点
レ点

七 富士水碑の訓読

A 富士水碑銘并序

下毛野黒川好祖撰

富士水有三源其一出於信州駒嶽釜無水是也其二出於甲州

富士水には三つの源がある

其の一は信州駒嶽から出する釜無水は是也

其の三つは甲州より出する

富士川には三か所の水源がある

その一つは信州駒嶽から出する釜無川である

そして残りの二つは甲州の

其出於笹子嶺笛吹き水是也其出於金峯山荒水是也合爲

其れは笹子嶺から出する笛吹き水は是れ也

其して金峯山から出する荒水は是なり

笹子嶺から出る笛吹き川と金峯山から出る荒川である

合爲 富士水至駿州而入干海懸騰百餘里雷呵電激禹不能鑿丹不

合爲して富士水とある

駿州に至りて海に入る

禹でも鑿つこと能はず丹でも通すこと能はず

三つの河川が合流して富士川となり駿河迄行つて海に入る

雷鳴が怒鳴り合うように激しい水勢が百里あまり続く

古代中国の禹王でも水路の改修はできない丹公でも

巖つゝい岩にはさまれて水勢が激しく水しぶき

フネ トオ モツ フタン
舟橋を通してこの負担を軽減し

上ジウ
言ゲン
して曰イワク

了以は家康に次の

Abstract

陸路で車馬が使える様に水路が有れば舟は使える

君は現地を見るに至りて

了以は現地を見て

1

(舟を通す水路の中に)

有 如瀧者有廣而淺者有石出水上有潛而伏者其如瀧者

有 如瀧者有廣而淺者有石出水上有潛而伏者其如瀧者
其の如き者がある 廣くて浅い者がある 水の上に石が出ていてある者がある 潜って伏せる者がある
其の如き者がある 廣くて浅い者がある 水の上に石が出ていてある者がある 潜って伏せる者がある

瀧の如き所・廣くて浅い所・岩が水の上に出ていてある所・浅い水中に岩が潜んでいる所・などがある

鑿高而平之其廣而淺者積石而挾之其石出水上有者燒爛而碎之

ウガ ちて之(川底)を平にする 其の廣くて浅い者 是石を積み之(川)を狭める
其の水上に石の出る者は焼いぞ柔らかにくして之(岩)を砕くす

削り壊して川底を平にする 廣くて浅い所は、小さい瀧に石を積み水を一か所に集めて水深を確保する 水の上に岩が出て通舟の障害になるところは之を焼いて柔らかにくして壊す

之其潜而伏者作徑尺長二丈錐頭杖構浮樓以下之因輶

其の(岩)が潜つて伏せる者は 直徑一尺長さ二丈の錐頭の杖を構へて之(杖)を吊り下げる 浮き樓に吊り下げる輶 輶を用いてこの柱を上下して

浅い水中に岩が潜んでいる所は 直徑一尺長さ二丈の杖に鉄の頭を装着し 浮き樓に吊り下げる輶 輶を用いてこの柱を上下して

輶以舉之必碎而後舍之不厭財力勞費之多少是以功成而舟通

で巻き上げて(オト)必ず砕いて後之(岩)屑を捨てる 財力と労費の多少を厭はずば 是を以て功成り(水路が開き)舟通が通る

潜った水中の岩を破砕する、破砕した石くずは捨てる 費用と労力の多少を厭わなければ工事は成功して舟が通行出来る

通溯游則一日而下雖其溯洄者無過三日四日也是以信

ナガシタガスナ わち一日で下る 其の流に逆らった上りと雖も 三日・四日を通る者は無き也 是を以て信

三船着場から岩淵まで下りは一日、流に逆らうのほりでも三日で済み、四日以上は掛らない 舟が通ること信州

甲飽於魚鹽而駿土足於材木五種百物副焉自是以來縁河之

コウウオシオに飽マンソク シカスンドモクザイタゴシュヒヤクブツが萬に副える 是から以來 河縁之

甲州では魚・鹽が十分行き渡り 駿河では木材が容易に入手でき、五穀や様々なものが手に入る 舟の往来が始ってから川沿いの住民の内

民仰食於其利者以千百數不特人物馬牛省勞也其後八

⑧ H
シヨミンは食を其の利に於いて仰ぐモノ

千センスウヒヤクヨリおとし
特に人物馬牛の勞を省くのみならず也ナリ

其の後八年川カワハ

舟運で働く人々は千數百人を超えていて

⑩
始めに考えていた人馬の勞を省く以上の効果があった

其の後八年が経過して

年川復壅塞將召君而謀之時君有疾長子玄之代父應命以三月發

フタヨウソク
復たび壅塞して

⑪
將マサニキミを召し之を謀らんとす

時トキニ君は疾ヤマイにあり

長子ハルユキ子ハルユキ父に代わり命に應ず

三月ガツを以て發

川に閉塞した箇所が発生した

了以を呼び寄せて閉塞を解除しようとしたがその時君は病氣であつた長男の玄之が了以に代わつて工事を担当することに成り、三月に京都を出発した

月發服役百數日川流稍稍欲復古會君疾病玄之告暇而省之

⑫
役ニエキフクするすること百數スウニチ川カワの流ナガレハ精古ヤイニシエカエルハ本ツ

タマタマキミの疾ヤマイオモシハルユキトマツコレチヲ省ナズ

⑬
工事を始めて百日余り、川の流はほほ以前の狀態になつた

丁度その時、了以の病が悪化したと知らせを受け玄之は急いで國に帰つた

⑭
省之至則前二日既已易簣實慶長十九年秋七月十二日也行

至イタルスナワサキダツ
れば則ち前こと二日既に逝去していた

實マコトケイチヨウネン
長十九年（一六一四）秋アキ七月十二日也

到着の二日前に已に了以は逝去していた、實に慶長十九年秋の七月十二日であつた

行年六十有一君諱光好字與七後號了以姓源城州嵯峨之人也

行年ギヨウネン
六十有一ユウ

⑮
君キミは諱セイゼンミツヨシ字アザハヨシチノチに了以と號する

姓は源・城州嵯峨の出身である

⑯
行年六十一歳である

人也系出於宇多帝母居江州爲佐佐木莊司後別居洛東吉田

系チスジウダミカドイデ
は宇多の帝より出て

母ダイダイ江州シユウスタメ
佐々木莊司たり

後ノチニ別れて洛東吉田に居む

血筋は宇多天皇の系統で

代々江州に住んでいた、この時は佐々木莊司といつた

後に転居して洛東の吉田に住む

田故或曰佐佐木氏或曰吉田氏京師四隅有官倉其西倉

故ユエにアルは佐々木氏と曰い 或いは吉田氏と曰う

京師の四隅に官の倉が有り

其の西の倉を

従つて佐々木とも或るいは吉田ともいふ

京都の四隅に役所の倉が有り其の西の倉を角倉と言つた

日隅倉君五世祖德春彦居其地故又曰隅倉氏德春子宗林宗

隅倉の倉と云ふ 五世の祖德春彦移て其の地に居み

故ユエに又角倉氏と曰う

德春の子・宗林・宗林の子・宗忠

了以の五代前の先祖・德春が角倉に移り住んだので角倉氏と名のつた

林子宗忠咸富累巨萬事覇主足利氏宗忠子宗桂薙髮學

の子宗忠咸富累巨萬事を力サナル

覇主足利氏に事カえる

宗忠の子・宗桂は髪を剃つて医学を勉強した

皆な富豪（嵯峨の土倉・金銀業）であつた

足利幕府に仕えていた

宗忠の子・宗桂は髪を剃つて医学を勉強した

醫嘗随僧良策彦而之明明人號之意庵歸而業益進娶中村氏

嘗て僧良策彦に随いて明に行く

明の人々はこの人に意庵と名付けた

佛国して医業は増々繁盛した

中村家から妻を娶り

かつて僧侶・良策彦に随つて、明（中国）に行つた

明の人々はこの人に意庵と名付けた

佛国して医業は増々繁盛した

中村家から妻を娶り

生君君長而有仕志唯不欲事織田豊臣両主遂謁神祖

君が生まれる君は成人して主君に仕える気持ちは有つたがただ織田・豊臣両主君には仕えようとしなかつた

織田豊臣両主に事える事を敬せず

遂に神祖（徳川家康）に謁する

君が生まれた 君は成人して主君に仕える気持ちは有つたがただ織田・豊臣両主君には仕えようとしなかつた

その後徳川家康に謁見を賜つた

最精水利凡君所疏鑿畿内有鴨水大井水東海道有天流水富

最モトスイリに精しく

凡オモ君が疏鑿した所は

畿内に鴨水大井水あり

東海道に天竜川・富士川がある

東海道に天竜川・富士川がある

最モ水路工事に精しく

凡オモ君が通船可能にした河川は

畿内に鴨水大井水あり

東海道に天竜川・富士川がある

東海道に天竜川・富士川がある

士水皆無不為萬世之利也後言水利者祖述之寛政九年

ミナバンセの利にあらざるはナナキナリ

フチにスリイを言う者のコレを相違する

寛政九年（一七九七）

いずれの工事も社会の重要な役目を果たしている

今後河川改修に携わる者は良くこれを参考にしたらよい寛政九年・（一七九七）

丁巳冬十有二月欲立石而勒君功績令信甲駿民無忘其惠甲

丁巳冬十有二月

君の功績を刻んだ石碑を建て、信州・甲州・駿河の人びとが其の（富士川通舟）恵みを忘れないようにしようと

甲州鰍澤里魁來乞余辭余嘗吏丐其地也銘曰

甲州鰍澤里魁來乞余辭余嘗吏丐其地也銘曰

私はかつて、この役所に勤めていたからだ

銘に曰く

甲州鰍澤の名主が私に碑文を依頼してきた

今までの事をかいつまんで言う

濬詰了以下此河瀕疏通水道賚勅民美石勒其績立鰍澤津迄于

河川改修の大家了以下此河瀕疏通水道賚勅民美石勒其績立鰍澤津迄于

諸々の民に賜った其の績を石に刻み

鰍沢の船着場に建立し

河川改修の大家了以下此河瀕疏通水道賚勅民美石勒其績立鰍澤津迄于

地域の人々に贈ってくれたその功績を石に刻み

鰍沢の船着場に建立し

迄于 萬年永念其神

萬年永念其神

万年前まで、永く其の神技を思い出そう

東武藤原知蛛書并篆額

神慶雲刻字

2002
櫛形山



士水皆無不為萬世之味也

静岡県

駿河湾

1:200,000

0 2 4 6